

学園輝装

ミステイ ドラゴーン

MISTY DRAGON

葉原鉄

表紙イラスト：秋月かすす



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『学園輝装ミステイドラグーン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

The cover art features two anime-style characters. On the left, a character with long grey hair and purple eyes is shown in a red and black outfit, looking towards the right with an open mouth. On the right, a character with long blonde hair and purple eyes is shown in a blue and white outfit, looking towards the left with a serious expression. The background is a dark purple gradient.

学園輝装
**ミスティ
ドラゴオン**
MISTY DRAGON

葉原鉄
表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

こんどうれいこ
近藤麗子

大財閥に連なる家柄のお嬢様。新開発された戦闘スーツの被験者となり、異能の者と闘っている。

となりととこ
戸鳴都斗子

男勝りな剣道少女。麗子とともに戦闘スーツ姿に変身、刀を自由自在に操る。

ふるま
古間ユイ

麗子と都斗子の親友。電車内で男たちに陵辱され、以来登校拒否になっている。

わいだ
和井田

学園の体育教師。「魔空体」に侵食されている。

月の光にもいきり立つほど、欲求を持って余っていた。

学生服の内側が汗で蒸れ、暑さで呼吸が乱れる。人影が乏しいのが幸いだ。夜十時を回り、商店街も七割はシャッターを下ろしている。

絶好のタイミングに頬を緩め、じつとりと前方の獲物を見すえた。

やや背が低く、肩が細い。白地に緑ライン入りのブレザー。緑基調のタータンチェックスカート。見慣れた制服だが、スカート丈は潔癖なほど長く改造されており、黒タイツに包まれた細い脚線を足首まで隠している。

左右でくくった髪が軽やかに揺れる。色は赤みがかつた金。ストロベリーブロンドと呼ぶのだと、本人が自慢げに言っていた。

見間違えるはずがない。学園屈指のお嬢様、近藤麗子だ。

「いいね……いい獲物だ」

高慢な学友にお仕置きすることを考えると、破裂するほど股間が怒張した。

「犯ってやる……今までの女みたいに、犯りまくって、イカせてやる……」

興奮のあまり唇が乾く。唾液は溢れるので、舌なめずりで湿らせた。

その舌の先が二股に割れている。

夜道を歩くにつれ、瞳が猫のように収縮した。下品な笑みが獰猛な獣さながらに歪む。股間から広がる匂いは、ほのかに甘ったるい。

獲物が角を曲がるのを見ると、蛇のように口を裂いて笑いたくなくなった。なにを考えているのかは知らないが、裏通りと言うべき細道だ。

いける。問題はない。自分には力がある。

《あの人》のくれた力で、何人もの女を餌食にしてきた。最初に陵辱したのは、近藤麗子と仲のよいクラスメイトだった。

「おまえのエロ顔も携帯で撮って、ネットにバラまいてやる」

近藤麗子を犯せば、残るクラスの美少女は巨乳の戸鳴都斗子ぐらいだ。級友全員制覇も悪くない。ますますの興奮に駆られ、獲物を追って角を曲がった。

「食らえ……!!」

甘く香る無色の気体を、意志の力で全身から前方へ放出した。

人気のない路地を、洗脳性のエネルギーが疾走する。直撃すれば、女のひとりぐらい意のままにできる。

力の流れを感じたのか、近藤麗子はツインテールを翻し、吊り眉吊り目を向けてきた。あどけなさを色濃く残した顔に、憤怒と憎悪がちりばめられている。

不機嫌なへの字口が、小さく開閉した。

「ドラグ・オン」

唇が動くのを、男は見た。

たちまち幼げな制服姿が消失した。力は素通りして霧散する。

「なんだ……？」

状況が理解できず、まわりを見回した。

「ここよ、変態！」

頭上からすさまじいプレッシャーを感じた。

頭と肩に衝撃が叩きつけられる。たまらず膝をつき、唾液を散らしながら天を見あげた。雑居ビルの狭間、蒼色にびっちり身を包んだ人影が、霞のような薄い輝きと満月を背負っていた。

両手の前できらめくサファイア色の球体は、力強いエネルギーの塊。さきほどの衝撃と同質のものだ。

「敵……！」

《あの人》に聞いたことがある。ここ最近、何者かに仲間が狩られていると。

「おまえか、近藤麗子！」

「アタシもだ」

背後から一声。

振り向けば豊富な肉付き。黒く艶やかなストレートヘア。紅に身を包んだ女が、赤く輝く刃を上段に構えていた。

「ぬあッ」

とつさに盾をイメージし、瞬速の斬撃を念力の壁で防いだ。

じりじりと刃がめりこんでくる。霞のごとく漂うルビー色の光が、男の鼻先をジュツと焦がした。

「ちいっ」

切断される前に、後方へ跳躍した。

ザンツ、と刃が顔をかすめる。下唇から顎先までが斬られた。

「おおお、となり、とここオ……！」

「ああ、アタシは戸鳴都斗子さんだ」

くう、とうめく男の上空から、蒼光のつぶてが降り注いだ。アスファルトがえぐられ、パチンコ玉ほどの小穴が無数に開く。跳びのくのくが遅れていれば、男が穴だらけになっていただろう。

「ちっ、惜しい。再起不能にしてやろうと思ったのに。せめて股間に一発ぐらいさあ」

蒼衣の近藤麗子が背後に降りてきた。その手には蒼光球が構えられている。

前方には赤衣の戸鳴都斗子。その手には赤光を帯びた刀が握られている。

男を挟み撃ちにしたふたりは、色違いながら同じ意匠の奇妙なボディースーツを着ていた。

首から足先までを覆う柔らかな繊維が、要所要所を硬質のラバーとセラミック、きらびやかなガラス質で補強されている。ヘッドセットに付属した半透明のバイザーで目のまわりを覆う様など、変身ヒーローのように近未来的だ。

「クラスメイトが仲よくコスプレごっこか」

コスプレ。悪くない響きだ。欲求が強まるにつれて、顔の傷が高速で癒えていく。

「クラスメイトだからって、アタシたちが容赦すると思うなよ」

都斗子が冷たく言う。

「アンタなんかクラスにいらないし」

麗子が吐きすてるように言う。

絵になるふたりだ。ボディースーツで身体のラインがくつきり浮き出るのが、美しい好対照となっている。

たとえば乳房、お上品に膨らみかけの麗子に比べ、都斗子はいささか下品なほどたわわに成熟している。軽く突けば壊れそうな小尻と、揉み甲斐のありそうな肉尻。引つ張り回したいストロベリーブロンドのツインテールと、白濁をぶちまけたい鴉の濡れ羽色のストリートヘア。

敵でもなんでもいい。彼女らの目的がなんであっても、陵辱したくてたまらない。

「かあああ………！」

男は腹の奥に意志の力を溜め、暴力的な欲求のまま体内の構造を作り替えた。

舌が肥大化し、口からはみ出たときには、尖端に穴が開いて銃口となっていた。

「来るぞ、麗子！」

「行くのはこつちでしょ！」

細身の麗子が路地裏を突進してくる。

豹のように速い。霞のごとく蒼光の残滓が振りまかれるため、残像を生み出しているようにすら見えた。

しかし男の反射速度も並ではなかった。

「どつちもイッチまええ！」

意志の力を喉から口腔へ装填し、舌先から連射した。威力を込めすぎたか、反動でたたらを踏む。

弾痕がビルの壁とアスファルトを穿ちながら、高速の麗子に迫る。

麗子が「フン」と鼻を鳴らし、手の甲に貼りついたガラス質を閃かせた。

「ルドラ・シエル！」

オオン、と蒼光が麗子の前で渦を描き、弾丸を弾き散らした。すかさず都斗子が走る。

「なんだよ、その変な名前！」

「かっこいいじゃないの！」

「オマエのネーミングセンス、変だよ！」

光の渦は弾丸を防ぎ、不毛な口喧嘩を引きずって接近してくる。

——来るか！

男は意志の力を砲弾サイズにした。

後は刹那のこと。

眼前にまで、麗子の盾。

「カアアアッ！」

舌先を大きく開き、砲弾を吐き出した。

ボギユアアッ！

渦が碎け、麗子が吹っ飛ぶ。

その横から赤い影。都斗子が肉感たつぷりの乳球を揺すり、麗子以上の速度で脇を通りぬける。

男の腹に熱が宿った。ヘソの下で横一文字、学生服がはらりと裂ける。どす黒く染まった腹筋から閃光が放たれ、暗い路地裏を満たす。

「な、なんだ、こりゃ……！」

光が邪悪な欲望を引き裂き、塵に変えていく。欲望に染まった意識もまた、光に飲まれて遠のいた。

「はむうッ、あふあつ、ひやめおお」

骨のない肉の塊が、又チュ又チュと融け入らなばかりに絡みつく。同性の唾液の味が、麗子の味覚器官に染みこんできた。

「んふっ、れちゅッ、あはあ……えへ、慣れてるでしょ」

麗子は頬笑みの余裕を見せつけたかと思うと、優しい手つきで都斗子の豊乳をすくいあげた。野放図に育った肉の果実は、ソフトに揉みあげられて柔々肉々と変形する。MDS スーツは汗ばんだ皮膚のように、赤くきらめきながらも皺を寄せない。

「うわあ、やーらかあ……巨乳ってこういうモンか……」

「あはあッ……そんな手つきまで慣れてないだろお……!」

柔肉の血管の隅々にまで、淡い愉悦感が染みわたる。女に与えられた悦楽など否定したいところだが、背筋と肩と膝が連鎖的にビクビクと小躍りしてしまう。

麗子は熱に浮かされた目つきで、乳房の芯を求めるように握力を強めていく。

「くひいいいッ……ひやめてえ……!」

「こ、これぐらい強く揉んでも感じる？ 乳首立つてる？ エッチい気分バリバリ？」

「な、なんで嬉しそうなんだよお、この変態いい……! あんうううッ!」

愛撫に緩急がつく。時に指の間から肉がこぼれるほど激しく、時に表面をさする程度の優しさで。肉の蕩ける麻痺感が先端に募り、スーツのラバー部をぐつと押しあげていく。

淫らな変化を強いるたくみな手つきに、都斗子は憎らしさすら感じた。

男たちは豊満型とスレンダー型の双痴態を前に、ヨダレを垂らして見入っている。

「今までは犯してばかりだったけど、レズつてのも悪くないな」

「男そっちのけで盛りやがって。焦らされてる気分だ」

周囲のペニスが角度をあげ、甘ったるい魔空体の臭気を強めていく。

下劣な男たちの前で喘ぐことも屈辱だが、それ以上に耐えがたいのは、彼らと同様に自分が勃起していることだ。

「すごい……都斗子、先つちよからどんどん漏れてる……」

柔乳が付け根からぐつと持ちあげられ、乳首がラバー部から「ピンッ」とこぼれ、繊維部をこんもり隆起させた。指先でトントんと叩かれ、乳輪に痛痒が走る。

「あひッ、んんンッ！」

「き、気持ちいい？ いいんだよね……？ オチンチンおつきくなってるから……」

人前でそんなことを言っただけでほしくない。屈辱感が海綿体に染みると、尿管が悔しげに張りつめ、ますます快感が伝わりやすくなる。

「じゃあね、じゃあね、こういうのはどう？」

ラバーと指の間で乳首をキュツキュツと連続して圧搾された。

「んくあああー！ あひッ、らめええ、乳首らめええ……！」

尻を揺らせば、鈴口から感悦の薄露が溢れる。一滴ごとに思考がぼやけ、性感のとろみに紛れていく。

憎き男たちの前だというのに、気がつくやうに仰向けに倒れ、校舎で射精したときのように腰をつりあげていた。ペニスを高々と掲げる形だ。

みな視線ばかりか、麗子の手まで這い寄って、根元をそつと握りしめてきた。

「はひあああッ！ やめッ、あッ！ あつ、やあああッ！」

硬直しきつた淫棒に感じる、麗子の手の平の熱。さきほど校舎でようやく擬似体液を放つたときと同じ、尿道の痺れが登ってくる。

「おつきいよ、都斗子……私の知ってる男より、ずっと逞しくて素敵……」

麗子は耽溺の言葉を乗せた舌で、スーッと浮かんだ乳首を転がす。都斗子が悦楽に押し込まれて腰を跳ねさせたところで、股間の隆起をシュツとひと擦り。

「んあああああああッ！」

勃起した乳首と肉茎が、これでもかと性感電流を放つ。狂おしいまでの愉悦に子宮がギョツと引き絞られた。拳を握り、足指を折つても、腰回りの脈動感を止められない。

魔空体に憑かれた者と同じ、恥知らずの獣に堕ちていく。涙と唾液が止めどなく落ちた。口が、閉じられない。麗子の責めがつづくにつれ、顎の力が抜けていた。

「ほんとうに、らめえ……！ 女なの……オチンチンで変にされちゃううう！」

「耐えて、都斗子……もうちよつとだから、本当にもうちよつとの辛抱……」

麗子はいったん身を起こし、肉腰をまたいだ。

ひ、と都斗子は息を止めた。屹立の真上で、肉溝がむねりと蠢く。かすかに開いた桃色花弁は、熟した果実のように蜜を漏らしていた。

濡れそぼった媚膜が近づいてくると、都斗子は肘で床を突いて逃げようとした。

「そ、それだけは許して……！ 女同士でなんて、おかしい……！」

腰が勝手に跳ねるせいで、うまく逃げられない。

「大丈夫……一夜かぎりのドリームだと思つて、ね？」

麗子はちろりと舌を出し、唇を湿らせた。

「お、おまえ、愉しんでるだろ……！」

「ち、違う！ 無理やりだから！ 和井田たちに脅されて、仕方なくだからあ……！」

麗子は慌てて肉茎を握り、狙いを定めて腰を落としてきた。同意を求めるようにまわりを見渡すが、男たちもすこしばかり呆れ気味であった。

「ふ、ふんッ、なによお……男なんてやつぱり自分勝手な下等生物ね……！」

くちゆり、と槍先が湿った肉溝にはまる。赤頭が破裂せんばかりに脈動した。

「はひゃああッ！ やひッ、んひいッ！」

「ううん……！ 都斗子のオチンチン、熱いよお……！」

悦楽刺激の減多刺しで痺れかえった亀頭粘膜に、濡れた肉薔薇がムチュムチュとへばりつく。溢れる濃厚な蜜で雄勃起が溶かされ、花卉の奥に啜りこまれるような、ひどく甘いたるい快感――。

熱くたぎった極太おしべを体内に迎え入れる女の充実感も、シンクロ機能で伝わってくる。挿入しながら挿入される二重の性感摩擦に、顎も腰も扇情的に持ちあがった。

――ぬぢゅぶッ！

加速的な摩擦感が雄棒と雌穴を襲った。都斗子の太ももと麗子の小尻が密着する。

「ひはッ！ ああああああーッ！」

全身が性感の痺れで痙攣し、その痺れが擬似ペニスへ集中するが――なぜか、射精には到らず、鈴口が内側から突きあげられるような苦しさばかり覚える。

かたや麗子から届く肉壺の満杯感、下腹から脳天まで稲妻のように駆け抜けた。

「ぶつとおい……！！ 気持ちいい……！！ 男なんかより、ずつとステキい……！！」

肉壁が男根をねぶるように激しくねじれる。小さなアクメ状態に、麗子の幼い口元で淫靡な舌なめずりがなされた。

「あはっ、あああんッ、キツキツでキモチいいでしょ、私のオマ○コお……！！」

「ひゃやあぁッ！ れ、麗子、動くな、うごくなあ……！！ そのまま、止まってくれないと、アタシヤバイよお……！！」

逸物は膣口の肉色環が糸になるまで押し広げ、食いちぎられるような締めつけを根元に味わっている。すぐ内側では、打って変わって苺ゼリーのような柔らかさに包まれ、肉イソギンチャクの優しいマッサージュを受けていた。

「んっ、んっ、あぁー……このオチンチンおいしすぎるう……！」

麗子がうわ言ながらに腰をよじり、熱棒を腹中で捻転させる。歓喜と昂揚が膣内に広がるのが、都斗子にまで伝わってくる。

「んあああああッ、やッ、えやあああッ……！」

ビクン、都斗子はまたのけ反った。何度目かになる意識の白熱だが、やはり射精はともなわない。

「ど、どうしてえ……麗子、どうしてこんなの耐えられるんだよお……！」

「わかんないけどお……あはっ、こうしたら、もつとキモチいい！」

麗子は突如、両手で都斗子の肉胸を鷲づかみにして、そこを支えに猛然と腰尻を前後させ始めた。

過敏な性感密集棒が根元から尖端へと搾りあげられる。海綿体を打つ快感の電撃に、都斗子の目がチカチカと明滅した。

「あひいッ！ あああーッ！ 麗子お、やめッ、ああああッ、焼けんんううーッ！」

ポチュッポチュッと淫響が弾け、肉汁が都斗子の腹上に漏れ広がる。肌の火照りが一往

復ごとにきつくなり、麗子からは蒸した尿臭が漂った。

恥ずべき匂いを気にするでもなく、麗子は憑かれたように蠢動している。

「締めつけると乳首ムキムキさせるのね……んはああッ！」

「はひッ、ああッ！ お、落ち着けえ……！ 男に見られてるんだぞ……この、バカ麗子お……！ ひううううんッ！」

「どうせなら、忘れたほうがあ……んッ、愉しめるしい……！」

「だから、愉しんでどうすんだあ……！ はふうんッ！」

やおら手首をつかまれ、細腰にあてがわされた。

「ね、押さえつけて……！ わたしの腰、思いつきりい……！ 都斗子からも、奥の奥までねじこんでえ……！」

麗子は言葉も終わらぬうちに、みずから腰を落とし始めた。ゴリユツと亀頭が袋小路を突いたことで、子宮口特有の息詰まる快感が神経感応した少女たちを貫く。

「んーッ！ んッ、ああッ、ああ、コレえ……！ このズクズクする感じ、都斗子にも教えてあげたかったのぉ……！」

麗子は甘くただれた頬笑みを媚態攣させた。

腰が微動するだけで、接触部に頭が白むような快感が走る。麗子が狙い澄まして腰をよじれば、男根の根元に性感電流の煮こごりが生じる。今にも射精しそうなのに、都斗子の

身体は男の悦びを拒んで放出しようとしな

「いうんうんうーッ！ いひッ、いらぬい……！ こんなお腹破れそうな感覚、いらぬいのにいい……！」

都斗子がどんなに下唇を噛んで拒絶しても、雌肉の最深部と雄肉の先端部はS極とM極のように密着して離れず、蕩ける痺れを交流させている。

ピッチリスーツの淫交コンビに、まわりで自慰する男たちも生唾を押さえられない。和井田も舌なめずりをして、嘲笑気味に小絶頂を愉しむ麗子に問いかける。

「エロい腰遣いしやがって。男と付きあつたときに仕込んだ技か？」

「あはあッ！ ば、バカにしないでえ……！ んはッ、これはあ、お気に入りのキャラの抱き枕にバイブを取りつけてえ……！」

シン、と場が静まりかえる。

「……おまえ、どうしようもねえな」

和井田がやけに疲れた声で言っている。まわりの男たちも、にわか引いていた。

(ぎ、ざまあみる……麗子の変態性をなめん……！)

都斗子が溜飲を下げたのも束の間、ぐらりと上半身を倒した麗子のツイントールで、敏感乳を撫でられた。

「あふッ」

さらに麗子の薄乳で豊乳を押し潰され、密着のまま艶美な唇を顎先につけられた。

「そろそろお、本気出しちゃうからね……」

ぞっとするような、淫蕩な声質。

「え……？」

都斗子は肩をがっちりつかまれて、耳の付け根を舐めあげられて、身体の火照りを高められたまま、結合を最深部からゆっくり解かれていった。

——ぬぷううう……ッ！

繊細で愛らしい麗子の腰尻が持ちあがり、掻き開かれた紅唇から濁汁まみれの赤銅色が吐き出される。

「ふっ、うくううう……！」

「あっ、あっ、あっ、もうすぐね、もうすぐね、今まででね、一番ね、きついピストンしちゃうからね……えへっ、すっごくキモチいいんだからあ……！ オチンチンもぎもぎってなっっちゃうんだからあ……！」

相棒の喘ぎ顔を舐め回す少女に、理性の色はほとんど残っていない。彼女の豹変の理由が、都斗子にはなんとなく感じとれた。

男性への不信感から女に走っても、身体は男根の味を忘れられなかったのだらう。なまじ否定してきたからこそ、ペニスの生えた女という格好の相手を得て、タガが外れてしま

った。

焦点すらおぼつかなくなってきた童顔に都斗子が怖気を覚えた直後、震える淫孔が陰莖の赤頭を啜えたまま停止した。

「んーッ……そーれえッ！」

パチンッ！——とふたりの腰が鳴る。一瞬で海綿体が擦りあげられ、性感神経が摩擦熱にあぶられる。つづげざま、パチンパチンと腰打ち音が連発され、ふたりの性器は高熱と愉悦感の塊に変わっていく。

「んえええあーッ！ あきひッ、んひおッ、おあああーッ！」

都斗子は無意識に麗子の腰へ手をあてがったまま、引きずられるように腰を上下させていた。たつぷり実った柔尻はプレハブの床を打つたび淫靡に形を崩し、滴る愛液で又チュ又チュと粘る音を立てる。

「あああああッ！ 都斗子お、キモチいいよお、今まで生きてきて一番キモチいい……！！ オマ○コいいいッ！ キモチいいいッ！ オマ○コすつごくキモチいいい！」

男に仕込まれたのか、妙な漫画の影響か、麗子の小さな口から漏れ出す卑猥な言葉に、都斗子のほうまで頬を熱くする。

腰遣いはさらに苛烈で、根元から先端まで一気に擦りあげて掻き降ろすの連続だ。

「んああーッ！ れ、れいッ、こッ、えあああッ！ ひやめれえええええッ！」

かぶん、と尿道の膨らみが噛み潰されると、走る電流に都斗子の腰が弾みあがった。

「はひッ、あえええええッ！」

躍動が奇形ペニスのピストンに加速感を与え、膣壁が高カリとイボ肉にゴジュツゴジュツと搔きえぐられる。

「やっぱり女はチンポまみれが一番似合うよなあ、おまえら！」

和井田が下卑た笑いをあげ、イボから魔空体の妖気汁をプリユプリユと噴き出す。

「あッ！ ひあああああッ！」

ゼリー質の噴射で膣壁が一瞬押しつけられ、雄雌の混合液が全開脚の股間から漏れ落ちる。さつきまで処女であった肉壺は、痺れたかと思えば妖気に冒され悦に蕩けた。

（も、もう、アタシがキモチいいのか、麗子がキモチいいのか、わかんない……！）

淫奔酔いの甘顔を止められない。顔まわりで痙攣し始めた噴出孔に身を縮める。

男たちもまた、薄ら笑いで喜悦声をあげた。

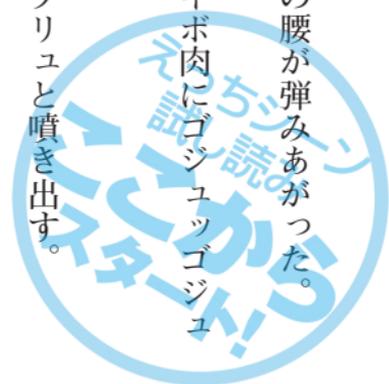
「くうう、か、髪、戸鳴の髪、ザーメン臭が取れないぐらいぶっかけてやる！」

「近藤、俺、前からおまえのこと精液漬けにしてやりたいって思ってたんだ……！」

口々に勝手な言い種で少女らを罵り、ぐっと腰を突き出してくる。

「ひッ……！」

もはや麗子の悲鳴は声にすらならない。淫欲に堕ちた令嬢最後の理性は、しかし、バッ



ク責めとスーツ内摩擦の猛加速ですぐさま溶かされた。

「はひいいッ、あつ、ひゃんあああッ！ やだやだやらあああッ、感じながらぶっつけられるのやひゃあああッ！」

「れ、麗子お、ああッ、んああーッ！ くんあああああッ！」

ふたり揃いの愉悦声が体育教官室を飛びまわり、男たちの辜丸をキュッと持ちあげた。グッと自慰の手が停止して、熱量がペニス尖端の鈴口に集約する。

「ああッ……！」

湧きあがる恐怖と期待が自分のものか、それとも麗子のものなのか、都斗子にはわからなかった。

びゅぐんっ！ ばびゅぱッ、びゅぐんッ！

駆け抜け、飛び出す男のエキスは、とつきに目を閉じた双戦士の美髪に憤然とむしやぶりついた。女の命たる繊細な絹糸がいたる方向から汚辱される。ストレートロングもツイテールも、汚されるためにあつらえられたオブジェのごとく、ひと筋ひと筋に肉汁を染みこませていく。

「くおお、すっげえ！ コイツらの髪、ザーメン似合いすぎだろ！」

「んんーッ！ う、うそだあ……！ 似合うはずなひいいいい……ッ！」

「あくッ、そ、そうよお……こんな、ネバネバで、臭くて、トロトロしちゃうようなあ……」

…あああ、ザーメンがあ……んあーッ！」

びちゃっ、びちゃっ、と付着する音が、ツンと漂う生臭さが、聴覚と嗅覚を通して脳を侵す。頭蓋の内では射精をされているような、おぞましくも甘美な想像が湧いて、全身をポツと熱くした。

「おっ、先生、コイツらぶっかけられてマ○コきゆうきゆうさせてません？」

麗子を後ろから犯していたのは他の体育教師だったらしく、老獺かつ粘着質な腰遣いで小さな肉脛をたっぷり感悦させていた。

「女なんざみんなザーメン好きの変態なんだよ。おら、みんなぶっかけまくれ！ ローテーションでザーメン漬けだ！」

和井田の号令で男たちは入れ替わり立ち替わり、少女たちの火照った身体に白ジェルを振りまいた。

突き刺したスーツの内側から、あるいは外側から、欲望の色が染み広がっていく。

(ア、アタシもう……身体中とろとろで、頭までトロトロに……！)

(わ、私もお……もう、ダメえ……！)

穴だらけにされた赤青のMDS少女は男好みの白色に染まって意識朦朧、しかし下腹には拙速な姦淫の急蠕動を引き起こした。

「んくううッ！ あひゃッ、ビクビクするう、お腹も先ッちよもビクビクするう！」

擬似ペニスが限界以上に凝固すると、引きずられて肉口も収縮する。

「あひあああああッ、く、くる、またくるう……！」

麗子も後ろから突き刺された剛直を小蜜穴全体でキュツキュツと抱擁し、膨れあがる感悦痺れに全身を脈動させた。

和井田ともうひとりの教師は示しあわせ、ここぞとばかりに全力で前後ピストンに興じた。あぐらの上に座らされていた都斗子は前のめりに倒れ、麗子に覆いかぶさるようにして後ろから突かれることになった。

「おらッ、さっさとイケ！ イッて立派なメスブタに生まれ変われ！」

「ああーッ！ ひゃひッ、んふくうううッ！ 焼けッ、アソコあついいいいッ！」

柔尻が腹肉で打たれる打撃音を伴奏に、淫声と腔温が上がっていく。噴き出すような愛液がフェラチオに興じる麗子の悦顔を汚した。

バイザーごと汁まみれの童顔は、決壊寸前の切ない表情のまま、繰り回していた舌を尖らせながらに痙攣させる。

「へひいいいいッ……！ ま、また、都斗子といっひよにヒつちやうううッ！」

折り重なったふたりの腔肉がビクビクッと最小径まで収斂し、男たちを搾りあげた。

「ぐううッ！ 生意気なマ○コめえ……！ 妊娠するぐらい濃いので飲ませてやる……！」

残酷な宣告への嫌悪感と恐怖が、触れあった部分を通して交流した瞬間、

パンツ！

ひととき大きなストロークで、子を宿すための秘宮が打ちすえられた。

「あああああ、ととこおお……っ！」

精液化粧に彩られた双美体が激しく脈打った。膣内が一斉に総毛立ち、襞粒のひとつひとつが性感の増幅器となる。啞えこんだ逸物ばかりか、全身を這う肉棒の摩擦感や熱感を過敏に拾って子宮頸に叩きこむ。

「ああーッ！ んかつ、あひいいいッ！」

快感のあまりクパッと開く奥口めがけて、口を尖らせて「おおう」と喘ぐ教師たちの欲望流が、散弾のごとく迸った。

どびゅどびゅどびゅうううッ！ びゅぐんッ！ びゅぐんッ！ びゅぐんッ！ びゅばッ、どびゅばッ！

密着した粘膜を連続的に突く灼熱液。粘つき、とろつき、女を溶かし、膣奥の快感集積地を串刺しにする。シンク口機能の合わせ鏡で、オルガスムスが無限に膨らみ、ふたりの意識を閃光に染めあげた。

「あひいあああああイクイクイクううううううううううええあああああッ！」

「と、ととこ、私、わらひいいいいいッ！ らめらめらめあああああッ！」

悦楽電流がうねりをあげて下半身をえぐりつくす。雄の熱液が子宮の中に飛びこんでく

るのを感じるたび、都斗子の擬似ペニスは連鎖的に噴精した。精液は麗子の口腔にも飛びこみ、共有した味覚に苦みばしった青臭さを染みつかせる。

「まだだ、もつとだ！ 出すぞ、子宮いっばいに！ おまえらも出せ！」

鶴の一声でそこら中から精子が振りまかれ、穴だらけのスーツを粘辱する。

「あああああーッ！ くひああッ、せいえきやらあああ！」

都斗子は髪を引つ張られ、頭皮の痛みにすら喘ぎながら、半開きの口で苦み汁を受けさせられた。麗子から送られてくる味を感じるよりも、じかに味わうほうが何倍も粘っこく、息が詰まる。ひどく卑猥な味に、くらんだ脳がパチパチ弾けた。

「ほひッ、んおおおおおッ！ 射精い、みんな射精してるううう……んぐつ、お、お口入ってくる、はいっへふりゅうううう！」

麗子は都斗子と男たちの精で口中を白濁プールにされ、呼吸でゴポゴポと泡立たせる。

ふたりは全身隈なくへばりつく肉粘汁で、溺れてしまうような心地に陥った。

「よっ、今度はこういう趣向でどうだ？」

和井田は都斗子を抱えて壁際に運ぶと、立ちバックのスタイルで二、三回腰を振って、イボのすべてから精子を猛噴射した。

（んううう……！ こ、壊れる……アタシのオマ○コ、壊れちゃうう……！）

都斗子は喘ぐことすらできなくなり、ただ膣内で荒れ狂う連続オルガに身震いをしてい

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>